

5

佐藤康平さん・坂本真惟さん



坂本真惟（公益財団法人札幌市文化芸術財団 札幌芸術の森美術館 学芸員）

佐藤康平（公益財団法人札幌市文化芸術財団 札幌文化芸術交流センター SCARTS）

坂本はSIAF2017から、佐藤はSIAF2020から、札幌芸術の森美術館の学芸員として札幌国際芸術祭に携わる。SIAF2024では「メディアアーツの森」と題し、同美術館で2つの展示企画を担当。

トーク内容

- ・ 学生として見ていた2014、部活感のあった2017、ボリュームがあった2020
- ・ 2021年からの「SIAF ふむふむシリーズ」などで、関係性が近づいた2024
- ・ 2020からメディアアートを軸に、かつ市民の方が親しみを持てる企画を検討
- ・ 過去に制作されたものを、いまの時代に合う形でどうやって展示するのか
- ・ 芸術の森は「遠い」からこそ、札幌の「都市と自然」や地域性を感じられる



インタビュー全編はYouTubeでご覧いただけます。

<https://youtu.be/S51x7p6M0TQ>





SIAF2024の展示企画を進めるにあたって、 どのようなことを考えて方向性を決めていったのですか？

佐藤：大きな方向性として、2020でも検討していた方向性であるメディアアートを軸に、かつ市民の方々にも親しみが持てるものを、という2点を考えて進めていきました。

SIAF2020では、ディレクターのひとりであったアグニエシュカ・クビツカ=ジェドシェツカさんとの企画の中で、札幌市が加盟する創造都市ネットワーク「メディアアーツ分野」を軸に、メディアアートを中心とした展開をしようという意図がありました。それを引き継ぎつつも、2014、2017と「現代アート」や「メディアアート」というものが、一般的な札幌市民の方々に果たしてどこまで浸透できたのか、という反省もありました。それを踏まえて、市民の方が親しみを持てる、来場するきっかけが生まれやすい作品を展示して、多くの方々に来ていただくことが大事だと考えていました。そうした2つの軸を両立させられるものとして、日本のメディアアートの第一人者でもあり、親しみやすいおもちゃの開発などもされている、明和電機の名前が挙がりました。

坂本：2つの展示のひとつ、明和電機の「ナンセンスマシン展」では、明和電機の4つのシリーズの展示をおこないました。ここで意識したのは、なるべく制作当時の姿で展示することでした。明和電機のおタマトーンや電動楽器は、ユーモアのある印象が強いと思うんですけども、こうして4つのシリーズを展覧会として見ていくと、作品を作る根底に「なぜ自分が生きているのか」「自分とは何なのか」というシリアスな問いが常にあることがわかります。そこを伝えられるように、作品はなるべく当時の状況で展示したいと思っていました。

明和電機が20代で制作した最初のシリーズ「魚器 (NAKI) シリーズ」というものがあるんですが、明和電機のキャッチーさからは想像できないような、「生と死」というテーマを扱っています。その中でも《ウケテル》という作品は、水盤の上に針がいくつも取り付けられていて、その水盤には金魚がいて、そばにある電話で117の時報に電話をかけると針が落ちて、運が悪ければ魚に当たってしまう、という作品でした。それによって、鑑賞者が金魚の運命を握っている、その残酷さに向き合うという作品です。

ですがやっぱりいまの時代だと、動物の倫理など多くの配慮が必要になるので、これをどこまで当時の形で展示するか、というのは事務局の方々も含めて話し合いました。その結果、金魚は入れて展示するが、時報や針が落ちる仕掛けは使わず、金魚の環境もしっかりと整える、という形で展示することになりました。そういう作品ひとつひとつを、どうやって展示までこぎつけるか話し合って開催を迎えました。
